
Last Lover

加織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Last Lover

【ZPDF】

Z7039D

【作者名】

加織

【あらすじ】

死んでから一年。誰も信じなかつた葵の前に現れたサクラ。誰からも忘れられていたとき、ふと花を手向けてくれた。優しいサクラに恩返しをするため、神から四日間の許しをもらつ。彼女と出逢い、優しさや人の繋がりを知つていく。そしてようやく両想いになつた日、葵に時間が迫つて……。

俺の人生貴方に捧げるよ。

だって俺：貴方が好きだから。

この世の何より、誰より、どんな価値のあるものより。

大切だから。

彼女に出会ったのは、シトシトと小雨が降る晩春の夜。今年は寒さがずっと尾を引き、ようやく最近暖かく本当の春を感じるようになっていた。

暖かくなり始めた都会の、大通りの路側帯。激しく行き交う車のテールランプに彼女の姿は照らされていた。俺を見つけると彼女は水色の傘を差しながら腰を下ろし、木によりかかる俺に花を手向けてくれた。肩に掛かる黒髪が雨で少し濡れていた。そんな髪から微かに花の香りが漂つてくる。『清楚な雰囲気のある女性』

誰が見てもそう感じるであろう彼女の姿だった。

胸元に光る、小さなダイヤのネックレス。キラキラとピンク色に輝いていた。

それが妙に俺の心に引っ掛かつて……。

「貴方もこんな夜に独りなのは寂しいでしょ？」

透き通つた声。

優しい笑顔。

彼女はそう独り言を呟いて、枯れ果てた花と自分が持つていた花を入れ替えてくれた。

彼女は静かに言葉を続ける。

「これ……私にはいらないものだから、貴方にあげるね」

その花は、桜。

花といつたら変かもしぬないけれど、一本の細い枝に多くの桜が咲き誇っている。

変な女……。

それが俺の彼女に対する第一印象だった。

だってこんな俺に話しかける奴なんかいないし、桜の花を手向けてくれたのは嬉しいけど。

「月とスッポンになっちゃうかなあ……」

彼女が立ち上がり、俺が寄りかかっていた木を見上げた。

俺が寄りかかっていたのは桜の木。

まさに今、咲き乱れると表現してもいい桜の木。

「……立派すぎるもん……」

そう言って彼女は黙ってしまった。

だけどこの桜の木より、俺は彼女が俺に手向けてくれた小さな桜の方が嬉しかった。

変な女だろうが、そんなことはどうでもよくて。

とにかく凄く凄く嬉しかった。

だって今日は俺の記念日だったから。

誰一人として記念日を覚えてくれていないだろうけど、誰一人俺のところに来てくれないだろうけど。

諦めていたそのとき彼女が来てくれた。優しい笑顔と共に、温かい空気と共に、彼女は俺の前に現れてくれたんだ。

俺にとつてどんなに嬉しかったか。彼女は一生知ることはないだろうな。

だけど、黙つて桜の木を見ていた彼女の瞳から涙が溢れ出していた。とても悲しそうで切なそうで…辛そうな色の涙が。ポロポロとこぼれ落ちてくる。

その涙が、さつき彼女が手向けてくれた桜にポタと落ちた。何があつたんだ?

そう彼女に尋ねても彼女には聞こえない。

彼女はそれから時が経つのも忘れて泣き続けていた。

翌日から俺は、彼女の近くで彼女を見守ることにした。

あの涙が忘れられなかつたから……。

彼女の傍にいることで、彼女のことがいろいろわかつた。

彼女は大学生だった。

春休みに入っている大学は、生徒の数も少なく閑散としていた。
しかし彼女は食堂や図書室へ行って勉学に励んでいた。

周りにはいつも友達がいる。

笑い声は絶えない。彼女の家は街中から少しばずれた住宅街のマンションだ。

白いペンキを塗った、鉄筋のマンション。その五階に住んでいた。
たった独りで…。大学生なのにマンション。何一つ、不自由なく生
活していた。

俺の生き方とは正反対だ…。

いや、俺は敢えてそういう生活を手放した。

その結果が今の状態で…。それはそれで仕方ないと思つている。

…と、俺の話はいいとして。

昼間、笑顔の中心にいた彼女は家に帰ると静まり返った空気の中で
ただ一人、静かに過ごしている。そして、哀しい顔をするんだ。
それは、毎日同じで…。

とにかく哀しい、切ない涙を流して。生活には何一つ不自由がない
はずなのに…。なんで、そこまで泣く必要があるのかわからなか
つた。

そして俺は、そんな哀しそうな彼女を見ていて何かしたいって思つ
た。

あの日の恩を返したいとかそういうんじゃなくて…。無性に無償で
何かしたいって思った。

あの涙が忘れられなくて、なのに彼女はいつも笑顔でいる。
絶え間ない笑顔の中に彼女はいる。それなのになんで、一人で泣い
てんの？

そして大学で熱心に勉強している彼女を見て神に祈ったんだ。
彼女の元にいきたいって。彼女のそばにいたいって。

今思えば、單なる一目惚れってやつだったのかも知れない。

ただ、それが顔とか容姿じゃなくって。

……彼女の雰囲気に。

そして、神から許しを得た。

俺は、四日間の許しを得たんだ。

一
四日間

俺が飛び出でたのは、翌日の夕暮れ過ぎだった。今日から四日間だけの、俺の第一の人生が始まる。

「短すぎ……」

そんな風に笑ってしまった。

しつかし、立派だよな～。

自分が飛び出でた場所は、自分がついさっきまで寄り掛かっていた桜の木の下。

それを見上げて思つ。

俺、ここで……。

「…………」

つて、考え込んでいる場合じゃねえか。

「…………ん？」

ふと自分がはいているジーンズのポケットに手を突っ込むと、小銭があることに気付いた。

「あ、コレ。

「六百三十円……」

確か俺が死ぬときポケットに入っていた金額だ。

おいおい、これで四日を過ごせつて？

ふざけんなよ……。今の時代、こんなはした金で何が出来るつーんだよ！

これじゃ、彼女へプレゼントの一つもり買つてやれねえ……。

「ハア~~~~~」

俺は声を出して溜息を付くと、気持ちを切り替えて彼女の姿を捲し始めようとした。

「さて、と」

この時間だと彼女はまだ大学かな。

このあたりの駅といえば……ここから数分の距離にある、あの大きな地下鉄の駅がある。

俺は辺りをキヨロキヨロと見回してみた。

大通りの路側帯。

ちょうど会社が終わる頃の大通りは、多くの車がスピードを出して走っている。

明日から連休が始まる。

連休前の道路は混雑し、人々も繁華街へ繰り出している。

突然木の元から人間が飛び出てきたのを見たら驚くだろうな。そうやって夕暮れ過ぎの風景をボーッと眺めていた。

それを車のライトとクラクションが搔き消し、俺は我に返った。

「 捜さなねえと」

俺は彼女がいつも利用するであろう地下鉄の駅へと向かつた。

改札口付近で待つていれば彼女に会える。

どんなに多く人がいようと、場所が変わったとしても俺は彼女を見付けられる自信はあった。

彼女に恩返しをしたらすぐにでも自分のあるべき場所へ戻ろう。

この世界に俺は既に存在しない。

いてはいけない存在だ。

だから彼女を救えたら俺はすぐにでも消えよう。

そう決意しながら俺は改札口付近に等間隔で並んでいる、地下を支える鉄の柱に寄り掛かり改札口奥の方に目を凝らしていた。

数分おきにドツと人が改札口奥の階段から下りてくる。

急かしい人々。

何をそんなに急いで、頑張っているんだろうか。

生きていた頃も、今も、俺にはわからなかつた。

だから世間に反抗しこなことになってしまったのだ。

「 ……」

俺は目を伏せた。

あの頃の自分は嫌いだ。

そして周りの奴等も嫌いだ。

人は自分のことしか考えていないくて、わからうとしないで、自分もそういう人間だって知っている。

あの頃はそんなことすらも気付かなかつた。

ただただ周りが憎かつた。

ふと、自分の世界から我に返り改札口のほうを振り返ると、新たに電車から降りてきた奴等が改札口へと押し寄せていた。

その中で俺の目が一人の女性に留まつた。

彼女だ！

周りの奴等の疲れ切つた様子とは違い、背筋を伸ばし歩いてくる彼女は眩しかつた。

だけど少し険しい顔をしていた。

俺は人に埋もれそうになりながら改札口へと向かう彼女を必死に目で追つた。

誰かを捜しているのだろうか。

キヨロキヨロと周りを見ている。

俺は少しだけ嫌な予感がした。

待ち合わせだろうか……。

まさか……恋人とか……？

彼女は誰かを見つけると改札口から離れていった。

俺はそれを追つた。

改札口の端のほうへ行くと、改札では読み取りが出来ない切符などを人の手で処理してくれる駅員室がある。

駅員室は切符の処理だけが仕事ではない。

電車の利用客のクレームや案内などを承る場所だ。

彼女はそこへ急ぐよにして向かつた。

俺は彼女の声が聞こえる場所まで近付くと壁の隅に座り込み、そつと聞き耳を立てた。

「本当なんです。今朝も触られたんですね。お願ひだから、鉄道警備隊をこの時間に配備してください」

「そう言われてもねえ……」この時間帯はまだ混雑のピークより早い時間だから、なかなかね

「そんなん……」

彼女が駅員に懇願している。

話の内容を聞いてみると、どうやら彼女は行き帰りの電車内で痴漢にあつたらしい。

「こちからも忙しいんですよ。実際に痴漢にあつたらその時に親告してもらわないと」

駅員の面倒臭そうな面がここから見ていてもよくわかった。

「だけどそいやつてすぐ親告できる女性は少ないんですよ……ほんとんび泣き寝入りで」

俺は腰を上げ、足を踏み出した。

「私もずっと我慢していましたけど……もう……」

「だから、すぐに言つてもらわないと事実かどうか、」

そこで俺は駅員の肩をポンと叩いた。

「彼女が痴漢にあつていたのは本当っスよ。俺同じ車両だったからたまたま見えたんだ。こここの駅員は被害者の言葉より加害者を信じるつづーのかよ。最低だなあ」

ふと、彼女を見ると薄つすらと瞳に涙を溜めているのがわかつた。

「鉄道警備隊を配備させてやれよ」

俺は駅員を睨みつけた。

彼女を泣かせる奴はどんな奴だろうと絶対許せない。

「わ、わかりました。至急手配しますので。本日はお引取り下さい」

そう言つと、そそくさと尻尾巻いて逃げるよつに事務所の中へと入つていってしまった。

ポツンと残された俺と彼女。

「本当にやつてくれるんだか……」

「信用ならねえな、と感ぐ。」

「あの…ありがとうございます」

そんな俺に彼女は深々と頭を下してくれた。

「え？あ、べ、別にいいって！俺が好きにやったことだし」

俺は慌てて両手を顔の前で左右に振ると、頭を上げた彼女と目がつた。

そして理由はわからないが、何故だかクスクスと笑い出してしまった。

これが俺と彼女が初めて交わした言葉。

これから幾度となく口にすることであろう『ありがとうございます』といふ言葉を、俺より先に彼女が口にしてしまった。

優しい柔らかな声。

『ありがとうございます』って礼を言いたいのは俺の方だつてのに……。

「取り敢えず、地上に出よっか

笑顔のまま俺は人差し指を上へと向けた。

「あ、そうですね。私北口のほうなんですけど、貴方は…？」

「俺も北口」

嘘の返事を笑顔で告げる。

とても嘘だと思えないほど、ほつきりとした声で。

俺たちは改札口から地下道へと歩き始めた。

「私、水沢サクラって言います。あの、貴方の名前教えてもらひつていいですか？何かお礼しないと…」

地下道を歩きながら会話が始まる。

そこで初めて知った彼女の名前。

『ミズサワサクラ』

その名前を何度も心の中で呟く。

一生、永遠に忘れないよう。

けど、マジいい名前。透き通つていてさうり流れる小河のようないい響きの良いキレイな名前。

「あの…？」

「え？あ、悪い！」

不思議そうに掛けられた声に、急いで我に返つた。

「俺の名前は……」

「俺は田をキヨロキヨロさせ、近くにあつた本屋の看板を見て答えた。

「葵でいいよ。十七」

「俺が消えたときの年齢。

一年経つたとはいえ、きっと外見上は成長していないんだろう。

中身も……だけ。

“葵”

本屋の名前だつた。

生きていたときの名前を出して、もし知り合いでに会つたときに彼女がいたら混乱してしまうだらうから、俺は敢えて本当の名前を隠した。

「あ、それに礼なんかいらないって」

俺は笑つて答えた。

だつて、こんなこと俺が彼女に救われたのと比べたら天と地くらいいに差がある。

「けど痴漢なんて許せねえな。そんな馬鹿げたこと」

「……そうですね。私なんかトロいからすぐ狙われちゃつて」

「やられたらやり返すくらいの勢いじゃないと駄目だよ」

その言葉に彼女はクスクスと笑い出した。

「え？ 何？！」

「だつて、やり返すつてどうやつて？ 私も痴漢するの？」

「……。ブツ！ 違う、違う」「

彼女の頗珍漢な言葉に俺も思わず吹き出してしまつ。

「サツに突き出していいつづー事だよ。触つた手首とつ捕まえて、

ゴイツ痴漢ですーつてさ」

「勇気あればねえ」

今度は暢気な口調でやつ言つ。

「俺がやるよ、勇気！」

「ええ？」

「今日から勇気四日分、処方してやる」
そつと悪戯に笑つてみせる。

四日分、俺が貴方の隣にいられる時間。

「私、保険証持つてないよ~」

彼女も俺の冗談に乗つて答えてくれる。

……初めて見たときより、ずっと良い印象だ。

一人で爆笑しながら、地道から表に出てきた。

「ところで、葵は家どこなの?」

「え。家?」

突然、そして唐突に聞かれた質問に硬直してしまった。

俺の家……。

そうだ、考えてなかつた。

「この…、近くじゃないの?」

「あーうん、まあそんなとこ」

つて、全然回答になつてないし……。

家はあの桜の木の下です、なんて言えないしなあ。

視線は宙に浮き、タラリと冷や汗が背筋を通る。

「……、ゴメンネ」

「は?」

「そつやつて聞くのつて、やつぱり失礼だつたよね。私と葵は知り合つたばかりなのに」

俺の答えが逆に彼女を困らせてしまつた。

「い、いやー違つよー! なんつーか、俺、頭悪いから住所覚えられなくつて!」

「自分の家の住所知らないの?」

「あ、そうー引っ越したばかりで…」

「あ~、わかつた。どうせ、 Hutch 出とかしていてほとんど帰つてないんでしょ?」

「……まあ、そんなとこ」

そう頭を搔きながら苦笑する。

「駄目だよ？ちゃんとお家に帰らないと親が心配するでしょう」

「しねえよ。だって俺ん家、両方とも親いねえもん」

父親は俺がまだ母親の腹ん中にいたときに他界していた。

母親は俺を施設へ入れ、そのまま行方知れずとなつた。その後、十年ほど経つたある日母親を捜し当てたが、もつて母親は俺の母親ではなくなつていた。

二人の幼いガキとテカイ家に住んでいた。

期待していた俺の居場所は、その時になくなつて……俺はたつた独りになつた。

「 本当？」

「うん。俺、捨てられたから」

あつさりとそんなことを口にしたのに驚いたのか、彼女は大きな瞳をパチクリさせていた。

「まあ今更だけどねえ。あ、因みに捨てたのは母親のほう。父親は俺の顔を見る前に死んだから」

彼女は俺から視線を逸らすと『そうなんだ……』と呟いた。

「そんな顔すんなよ。なんだか俺が悪いことしたみてえじやん」「でも……」

「いーのー！俺は今、物凄え幸せだから」

こうやつて復活して、貴方と話せているんだから。

そのことがどんなに嬉しいか、この先も貴方は知ることはないんだろうね……。

彼女はそんな俺に笑つた。

「そういえば明日から連休だね。葵はどこか行く？」

「予定はないよ。ミズサワさんは？」

「ふふ。サクラでいいよ。私は今、大学の春休みだけビビーにも行く予定無いな～。何しよう

「何処に行つても混んでいそうだよね」

そんな他愛も無い話をして駅から大通りへと向かった。

さつきよりも車の量は増え、足早に歩く人々もどこか浮き足絆つて

いるように感じた。

俺はサクラの歩調に合わせながらゆっくりと歩いた。

大通りの歩道。

そこに一本だけある桜の木。

会社や学校帰りの人々が、その下を通り過ぎるとき、その艶やかさに目を奪われている。

立ち止まり見上げる者、携帯のカメラで写真を撮る者……。

たくさんの人がこの桜を見ててくれている。

その下に俺はいた……。

桜が艶やかで、華やかなお陰で足元の俺は……忘れられていた。

サクラはその木の下に来ると立ち止まつた。

「ここ」の桜、本当にキレイだよね。大通りで車がたっくさん行き交つていて、排気ガスとか汚い淀んだ空気の中で、この桜だけ別世界のような気分にさせてくれる」

その桜は鮮やかで、艶やかで……。

大通りの中で、必死に咲いていた。

「…………強いよね」

彼女はポツリ呟いた。

それが何故か妙に心に響いた。

「…………強くなんかないって」

「え？」

強い奴なんてこの世にはいない。

それがどんな生き物であろうと……。

「きっとそうやってサクラみたいに、キレイだつて言つてくれる人がいるからこうやって咲いていられるんだ。支えてくれる奴がいるから……」

言いながら彼女のほうに振り返ると、笑つて納得しているよつだつた。

もし彼女が辛い思いをしているのなら、俺は彼女を支える道具になりたい。

「…………この桜が、この人を支えているようだよ?」

ふと彼女が視線を落とす。

その先には、俺が棲家としていたボロい牛乳瓶を花瓶代わりにしていた墓があつた。

「車にはねられたか、バイクとかの事故で亡くなつたんだろうね……」

そう言つて彼女はその場にしゃがみ込んだ。

そして一昨日、俺に手向けてくれた桜の花弁を人差し指で優しく触れた。

「…………桜」

「うん。一昨日私がお供えしたの。ある人からもらつたものだつたんだけど……。馬鹿みたいでしょ。これだけ立派な桜の木の下に、こんなに小さな桜なんて……」

エヘヘと照れ笑いをしてみせる。

「そんなことつーきつとすげえ嬉しいと思つよ。だつてここに供えられてんの、すっげえ枯れ果てた菊の花だつたんだよ?それに比べたら……」

どれだけ嬉しいか。

奇跡に近いほど、期待していなかつた優しい光。

「そうかなあ。喜んでくれていると私も嬉しいけど

よいしょと掛け声をかけて再び立ち上がりながら小さく照れている。

「当たり前じやん。…………すっげえ嬉しいよ。事故つた奴つて後悔ばっかり頭にあつて、だからサクラみたいに気にかけてくれる人がいると安らぐんだよ」

「気持ちわかるんだ」

「あ……、ん。俺も事故つたこと……あるから……」

まさかこの場所で、とは言えない。

「そなんなど。…………でも無事で良かつたね」

彼女の言葉に俺は悲しい瞳で頷いた。

運命も俺も卑怯だ。

こんなに優しい瞳の人には生きていたらきっと出会えなかつた……。
死んでから出会つたつて意味ないのに……。

「喜んでくれてるといいな~」

俺は彼女の嬉しそうな笑顔につられた。

悲しみにくれてる場合じやない。

復活した四日間を楽しく、真つ直ぐに生きなれば。

「……え、あれ？でも、葵知つてたの？ここに菊の花が飾つてあつたつて」

ふいに聞かれた質問で俺は一気に目が覚めた。

ギク！

別に対した質問でもないのに一気に冷や汗が出てきてしまった。

「し、知つてたよ！たま～にここを通るから、知つてた！」

焦るな、焦るなと心の中で叫びながら口から出でくる言葉は突っ掛かつて、どもつてしまふ。

「ふ～ん。でも葵までも心配してもらつて、きつといひで「くくなつた人は嬉しいよね」

「そ、そうだね」

「例え枯れた菊の花が置いてあつたように、周りの人に忘れられていても、こうやって気に掛けてくれていた人がいる限り幸せだよ」
安心した笑みを浮かべる彼女に俺は泣きそうになつた。

俺が幸せだということに……。

彼女が言つんだ。

幸せだつて。

それなら俺は幸せだつたのかもしれない。

「幸せ……」

俺はポツリと言葉を漏らした。

「何？」

「俺も今は幸せ」

心の中だけでは溢れてしまつ気持ちを言葉に出した。

「な～んも無いけど、幸せ」

そう笑顔で言える。

何故だろ？……。

あんなに卑屈だったのに、あんなに世の中が嫌いだったのに。
何が幸せなんかなんてちっともわからないのに。

こんなにも簡単に言葉に出来るのは何故だろ？

「そつか、凄いな……葵は」

「どうして？」

「自分が幸せだつて断言できる人つてあまりいないから。でも葵は
知ってるんだなつて。何も無くても、生きていることが幸せだつて
ことを」

生きているだけで幸せ、か。

あの頃は生きていることさえも苦しくて、辛かつた。
だけど死にたいなんて考える余裕も無くて。

ただただ最低の人間として生きていた。

「……サクラは？ 幸せ？」

俺はふいに彼女に質問してみた。

その答え次第で俺の今後が決まる。

彼女が幸せですつて屈託の無い笑顔で答えてくれれば、俺が出る幕
は無い。

彼女が幸せじゃなかつたら……。

「私は……。どうだろ？ 周りに流されて、嫌われないよう^に笑顔
作つて……。それでも生きているからつてだけで幸せになるのかな」

「幸せじゃないの？」

「わからない。ただ辛いの、とつても

それが彼女の答えだつた。

初めて彼女を見たときと同じ表情で、寂しそうに桜を見上げている。
細い肩が震えて、キレイな瞳が潤んでいる。

小さな手のひらで拳を作り、ギュッと握つて……。

「サクラ……」

俺は耐え切れずに、彼女の硬く握られた拳を自分の両手で包んだ。

彼女はハツとしていつもの笑顔を作った。

いや、作ろうとした。

「……なんてね。本当は自分に自信がないから他人のせいにして逃げるんだ。ごめんね、こんな話。出会ったばかりの葵にするなんて！何でだろう、本当、『ごめんね』

俺は悲しかった。

必死の笑顔が悲しかった。

「俺は嫌わないから。だから無理して笑顔作るなよ」

彼女がどこまで出会つたばかりの自分のことを信用しているのかわからない。

信用されたいわけじゃない。

俺はただ彼女に幸せになつて欲しかった。

俺を唯一助けてくれた人だから。

「な？」

「……うん、ありがとう」

小さく笑つて彼女は泣いた。

俺は彼女の両手を包んでいた自分の手をもつと力強く包んであげた。

彼女の涙の原因を知りたい。

もつと彼女を知りたい。

助けてあげたい。

涙をどうにか止めた彼女を俺はマンションまで送ると約束をした。

途中、サクラは楽しい話ばかりをしていた。

俺へ気を遣つてているのだろうとすぐに察した。

そんな彼女を見ていた俺は心中で再び強い決意をした。

絶対に彼女を救う、と。

白い鉄筋のマンションが見えてきた。

まだ新しいのか、雨が降つたとき出来る黒い涙のような汚れも無い。

玄関ホールのガラスも透き通つていて指紋一つ無い。

「ここでいいよ、ありがとうね」

サクラは振り返って笑顔で言った。

何かつなげなければ、今日で俺たちの付き合いは終わってしまう。
でもどうやつたら明日につなげられるだろ。彼女を救うためには、彼女の近くにいなければどうにもならない。
だけど俺にはどうやって誘つて良いのかまったくわからなかつた。

「あのさー！」

考え無しでついた言葉だったが、運良く彼女のほうから口を開いてくれた。

「ねえ、葵？ 明日時間あつたらまた私と付き合つてくれないかな？」
明日時間があつたら付き合つて欲しい。

その言葉で希望の光が見えた。

明日につながる、彼女を救うことが出来る、希望の光。

「あー、うん」

俺は敢えて、時間が空いているか確認するかのように間を置いてから返事をした。

「もし良かつたら海に行かない？まだ寒いかもしれないけど、なんか行きたい気分なんだ。葵が嫌じやなければの話なんだけど……」
そんなの、

「大丈夫だよ。オッケ！」

彼女の誘いを断るなんて、俺にはとても出来ない。

これで明日につながる。

それがかなり嬉しかつた。

彼女を救えるから…？

違う。

彼女にまた会える、話せる。

それが嬉しかつた。

「ありがと」

一日目は彼女のその一言で終わつていつた。
また言わせてしまつた。

『ありがと』

空は快晴。

乾いた空気が温かい春風を走らせている。

俺はサクラに会う前に寄り道をしていた。

若者が多く、賑やかな露天が並ぶ通りで色々と物色していたのだ。

「……お、これいいかも」

俺は一つの物を手に取った。

それは俺の手の中で時を刻んでいる。

「彼女へのプレゼント？んな安もんでいいの？」

露天の店主がからかい気味に言った。

俺はチラツとその手にある物に目を落としたが小さく微笑むと店主にラッピングを依頼した。

「これがいいんだよ」

手持ちの金じや高い物は買えない。

でもこれには俺の気持ちがこもっている……。

金では買えないくらいの気持ちが……。

それをポケットに突っ込むと、彼女との待ち合わせの場所へ向かった。

昼過ぎ、俺たちは海にいた。

殺風景で釣り人もチラホラ数えるくらいしかいなかつた。

「付き合ってくれてありがとうね」

彼女は笑顔でそう言った。

昨日の涙なんか忘れさせるくらいに大きな笑顔で。

「別に俺もヒマだったし」

俺も敢えて聞かないようにしていた。

辛いことを胸の中では必死に押さえ込むのは良くない、けれどそれを無理矢理聞きだそうとするのは尚嫌だったから。

彼女が心を開いてくれるまで……。

俺は最大限の努力をしよう。

「海つてやつぱり気持ちいいよね～」

昨日は夜だったから、はつきりと見えなかつたけど……サクナマやつぱりキレイだ。

凛としていて、清楚で、優しい。

自分の鼓動が速くなつていいくのに気付いた。

俺……やつぱり……好きだ……。

初めて見たときから……、もつともつと好きになつてゐる。

俺が一目惚れするなんて……。

「葵？」

「「こめん、何でもないよ……」あ、競争でもしようか？」

「え？ あ、ちょっと！」

俺は駆け出していた。

清々しい気持ちだ。

好きつて改めて気付いて、それがこんなにも爽やかな気持ちにさせてくれるなんて……。

そうだよな、好きじやなきや救いたいつて思わないもんな。

こんなに頑張るつて思えない。

嬉しくてはしゃいでしまう。

「サクラー！」ち、ち、ち、ち……！」

「葵速いよ～」

俺は彼女の手を取ると波打ち際まで走つた。

「駄目だつて、濡れちゃう！」

「平気、平気

「葵～！～！」

足元に波が掛かる。

靴に染み込む海の冷たさ。

こつやつて彼女とこんなにはしゃげるのはこれが最初で最期になるんだろうか。

水飛沫を浴びて笑う彼女の表情は、俺が見てきた女の中で誰よりも

素敵で誰よりも輝いていた。

「サクラ！キレイだよ」

素直な感想を笑顔と共に告げる。

「何言つてるの～。お世辞言つても何も出ないぞ！」

「そんなんじやねえよ」

キラキラ輝く彼女の姿を、俺はきっと一生忘れないだひつ。何度も何度も心の中で再生されて、それでも擦り切れる事無く永遠に忘れない。

「辛くても、苦しくても必死で自分の道を歩こうとしているサクラが凄くキレイだよ」

「……葵」

ふと笑顔を止めて、立ち尽くした。

俺は彼女の生き方を褒めたかった。

「必死で踏ん張っているサクラはカッコいいよ

俺には真似できない。

多分、一生。

それでもそんな彼女を田で追つてしまつ。

憧れてしまう。

「そりかな…。そり思つたことは一度もないんだけど

「そりだよーそれに俺は置いていかないよ。絶対に離れない。……

…いつも近くで見守つているから」

「……葵」

「だから自信持つて。貴方はとてもキレイな人なんだから

この世にキレイなものなんてないつて思つてた。

全てのものが薄汚れていて、強かで……裏表のある残酷なものだつて。

だけどここに居る、俺の横で澄んだ瞳をしている彼女は違つていた。美しくてキレイで、そして優げだつた。

「はいコレ、プレゼント」

俺は急いでジーンズのポケットからある物を取り出した。

「え？」

包装紙に包まつたプレゼント。

彼女はそれと俺の顔を交互に見比べていた。

「いいから受け取つて。つつつても、すげー安物だけね」

「……うん」

俺からそのプレゼントを受け取ると彼女は『ありがとう』と言つてくれた。

「開けていい？」

俺は目を細めて頷く。

ポケットに入れっぱなしだったために汚くなつてしまつた包装紙を、

彼女は丁寧に剥がしていく。

そして中から出でてきたのは……。

「時計……？」

「うん。このクマのキャラクター、サクラに似合つと思つて。可愛いじゃん？」

千円の時計だつた。

それをまけてもらつて六百円にしてもらつた。

俺の持ち金、残り三十円（苦笑）

玩具みたいな時計。

だけど彼女は嬉しそうに微笑んだ。

「ありがとう！私このキャラクター好きなのー！」

その笑顔が見たくて。

その言葉が聞きたくて。

本当はもつといいものを買つてあげたかった。

もつと高価で価値のあるものを。

だけどこれが俺の精一杯で……。

「俺の少ない小遣いから出したんだから、大切にしろよー。俺があげた時計で、人生を刻んでいくてほしい。」

それは俺の我儘かもしれないけれど、俺の大きな感謝の気持ちが詰
まつた時計で幸せな人生を歩んでいくてほしいから……。

「葵つて本当は物凄くマメ?」

「え? そんなことないけど.....」

「だつてこんな風にプレゼントしてくれる男の子なんて、最近いな
いよ。恋人の誕生日だつて覚えられない人もいるくらいなんだから
そう言つて声を出して笑う。

そんな彼女につられて俺も笑つてしまつ。
どうしてだろ?.....

彼女が笑つていると、凄く嬉しくてドキドキして.....そして胸が
締め付けられそうになる。

俺は後何回、この笑顔を見られるのだろうか。

「俺はマメでもいい奴でもないよ。昔、すっげー荒れてたしね」

「え? そうなの?」

「卑屈になつて自分も周りも嫌いだつた.....。だけどサクラと会つて
変わつたかな」

警察に補導されたこともあつた。

相手を傷付けて、迷惑をかけて.....。

それでも周りが見えてなかつた。

だから天罰が下つたんだ.....。

暗い闇を彷徨つて自分の記念日すら誰も来なくて、誰が手向けてく
れたかも忘れてしまつた枯れた菊の前で悲壯にくっていた。

そんな時、貴方が来てくれた。

優しい香りと共に。

「.....私と? 昨日出会つたばかりなのに?」

そう、そんな短い時間の間に貴方は俺を変えてしまつたんだ。
俺を救つてくれたんだよ。

「出会つたばかりでも、俺は変われたんだよ。そのお礼!」
「別に私何もしてないけど.....でも、大切にするね」

時計を腕にはめながら顔を緩める。

「サクラ.....」

俺はそんな彼女に伝えたかつた。

「ん？ 何？」

彼女と瞳がぶつかる。
嘘がつけなくなる、瞳。

痛いくらいに真っ直ぐで、清らかで……。

「昨日さ、サクラ言つたじやん？ 自分に自信がないから他人のせいにして逃げてるって」

俺の大好きな、この世で一番高価な宝石。

輝きを失わない、宝物だ。

「…………うん、言つたね」

「俺、思うんだけど」

その宝石と、貴方の心に刻みたい。

『未来』を。

これから貴方が歩んでいく、幸せな未来を……。

「別に逃げたつて構わないと思うんだよね。自分に自信がなくたつていいじやん。それに自分に自信がある人つてそういうねえつて。ほとんどの人間がコンプレックスの塊で生きているんじゃない？ それを受け入れようしたり、乗り越えようとしたりしながら努力して生きているんだよ」

「…………私はどうだろう。努力、か……」

「サクラは偉いよ。そのままでいいって。大丈夫」

俺はポンとサクラの頭に自分の手を置いた。

「子ども扱い」

ブクッと張れた彼女を見て、頭に置いた手をクシャクシャ掻き撫でた。

「ハハツ。それでいいよ！」

変わつて欲しくない、今ままの貴方が俺は好きだから。
だから…………ずっと、そのままでいて……。

俺の知らない貴方なんかにならないで……。
俺は心の中で必死に願つていた。

少しはしゃいで時間を忘れた後、海岸にある階段へと腰を下ろした。

「この海の先つて何処につながってるのかな…？」

「ハワイじゃね？」

「ハワイ…か」

突然サクラが暗い顔をした。

「どうした？」

「うん、ちょっとね。お母さんと行つたことがあつたから」
そう言いながら胸元でいつも輝いているピンクのダイヤのネックレスを手で触った。

小さなダイヤはサクラの手の中でキラキラ光っている。

「そのネックレスは？」

「『』のネックレスは、母親の形見なの」

「…え？ あ、御免！ 僕何も知らなくて…」

嫌な思いをさせてしまった！

慌てて頭を軽く下げ、陳謝する。

が、彼女はそんな俺にフツと優しい笑みを向けてくれた。

「大丈夫！ 母親が亡くなつたのは、ずっと前で…。私もよく憶えてないくらいだもん。だから葵と一緒にだね」

『葵は父親が亡くなつているんだもんね』と静かに付け足す。

初めて知つた、彼女に母親がいないことを…。

寂しい思いをしてきたのかな？

「あ、父親は？ いるんだろ？」

急いで切り替えた俺の質問に、彼女は更に顔を曇らせた。

「……父親は、いるよ。だけど、全然会えなくて」

「え？」

彼女は話しお出した。

「私の父親は、企業の経営者なんだ。子供がたくさん出でてくる『マーシャル見たことある？』

俺は少し考えた…が、俺が死んでからこの世界は一年経つている。
申し訳ないが、『マーシャルだっていくらなんでも一年以上も同じ

ものを使つていないのである。

全然わからない。

「…………ああ、なんとなく」

そう適当に相槌を打つた。

「その会社の経営者で、数百の子会社を持つていて……」

「すっげえ、金持ちじゃん」

「そんなことないよ」

苦笑しながら話を続ける。

「父親は今、アメリカに住んでいるんだ。本社が十年位前に移転して……。忙しい父とは小さい頃から全然会えなくて、まるで他人みたいだつた。私には一人兄がいるんだけど、兄も経営学を学んで父と一緒にアメリカへ行つてしまつたんだ」

「じゃあ……」

「うん。私独りぼっち。進学して、父が仕事用で持つていたマンションに今は住んでいるの。広いマンションで」

知つてている。

その広い家で貴方が独りで泣いていることを……。

その訳を知りたい。

そして救いたいんだ。

「でも友達とかいるじゃん。独りぼっちじゃないよ。それに好きな人とかもいるんだろ?」

「好きな人、かあ」

遠い目をしながら呟く彼女。

少ししてその目に、涙が溢れていったのに俺は気付いた。

「…………好きな人と、何か……あつたの…………?」

恐る恐る聞いた俺の質問に彼女は首を左右に振つた。

「好きな人なんて大層なものじゃないよ。父親が決めた人なの。許婚つて感じかな?彼は私のことなんて好きじゃない。自分の会社のために結婚するの。父親も自分の事業のために結婚して欲しいって

「そんな……」

「それに昔、付き合っていた人もいたんだけど別れさせられたの。私は意地でも別れたくなかつたのに、父親が当時の彼にお金を渡して……。そしてその彼はあっさりと私の前からいなくなつた」

淡々と話す彼女の表情が辛かつた。

「サクラの人生なのに、サクラが決められないなんて……」

「仕方ないんだよね。父親の事業にはいろいろな企業との連携が必要になる」

「その為にサクラが犠牲になつてゐみたいじゃん」

「それでも……、それでも会社を大きくしたいんだよ」

娘の人生より、自分の会社のため。

それって間違つてるよな？

「小さな頃からそういう感じで育つてきただの。友達も好きな人も、そのせいで私の周りから離れていく。私を置いて、皆離れていくのが怖い」

半分諦めたように彼女は遠い目をした。

“離れていつてしまつことが怖い”

それが彼女の涙の原因。

「サクラ……」

俺はそう彼女の名前を声にするのが精一杯だった。

バカだつた。

彼女を救うなんて……俺は馬鹿げたことを高々と掲げていた。出会つたばかりの奴に相手の人生を救うなんて事奇跡に近い。どんなことをしたら、どんな言葉を掛けたら彼女が救われるかなんて、俺にわかるはずもないのに……。

そんな大層な人間じやないこと、自分が一番わかつていたはずなのに。

俺は相当のバカだ。

離れていつてしまつことが不安だといって泣いている彼女に、離れて消えてしまう運命の俺がどう足搔いても彼女を救うことは出来ない。

い。

本末転倒だ。

「.....」

だけど、それでも救いたかった。

守りたかった。

俺を救つてくれた人だから。

俺に“ありがとう”って言ってくれた人だから。

「サクラ.....」

「な、なんてね！被害意識丸出しだよね。もつと辛い思いしてる人は
いっぱいいるのに」

俺もそう。

自分に自信がなかつたから周りに反発していたんだ。

他人を傷付ける事で、孤独を紛らわしていた。

.....いや、本当は憂さを晴らしていたんだ。

そんな俺に神から罰が下つた。

だけど、彼女にはそんな思いをさせたくない。

孤独だつて、寂しい思いをさせるのは俺自身が嫌だつた。

俺の一の舞にはならないでほしい。

神から罰が下るのは俺だけで十分だ。彼女にはいつまでもどんなと
きも、笑顔でいてもらいたいから。そんな彼女が好きだから。

「.....守る」

俺は考えた。そして、一つの決心を彼女に伝えようとした。

けどそれが実行され続けるのはもしかしたら無理かもしねない。
いや、無理というよりも不可能に近い。

今言つたら嘘になるかもしねない。.....きっと、嘘になる。

「.....」

彼女に会つてから俺は嘘を重ねていく。これまで嘘なんて数え切れ
ないくらいついてきた。そのことに罪悪感なんてなかつたし、むし
ろそうやって嘘を付くことで相手に自分の真意をわざと見せないよ
う取り繕つてきた。

だけど、彼女に嘘を重ねる度に胸が張り裂けそうになる。

：張り裂ける？

違つ。

締め付けられそうになるんだ。

「何？」

彼女が不思議そうな顔を俺に向けてくる。

だけど…。

今、ここに、嘘をついてでも伝えたい気持ちが… 真意があるんだ。

「貴方のことは俺が守るよ」

「…え？」

「昔荒れてた俺が、幸せにする…なんて言えた義理じゃないけどさ。…だけど、これだけははつきりしてる」

たとえこれから先、今言つ言葉が嘘になつたとしても。

「貴方を全力で守るよ。どんなことがあっても、命に代えてもこれから先は俺が貴方を守つてみせる。約束するよ」

触れると、壊れてしまいそうで。

言葉にすると、すぐに消えてしまいそうで。

ずっと避けてきたんだ、この気持ち。

だつていつか貴方を傷付けてしまつ日がくるから。

それでも守りたいって思うんだ。

そばにいたって思うんだ。

これが俺の真実だから。

本当の気持ちだから。

今しか言えない気持ちを、今の貴方に伝えたいんだ。

俺の言葉を聞いていた彼女は一瞬呆気にとられたような表情をしていたが、すぐにクスクスと笑い出した。

「急に何を言い出すかと思つた！」

「え？！」

「だつて、葵はまだ十七でしょ？これから先、長いんだよ。命に代

えても、なんて言葉を使うにはちょっと早いかな？」

大学生の彼女と、十七歳の俺。

どうやっても彼女にとつたら、俺は弟くらいにしか見えてないんだろ？。

ケラケラ彼女が笑う。

けど、それは嫌だった。

我儘かもしれないけど、どうせ彼女と離れることになるのなら俺は自分の気持ちをきちんと彼女に知つてもらいたかったから。

「……本気だよ」

真剣な目で、彼女に伝える。

俺にはないんだよ。

これから先、が……。

だからきちんと真実を知つてもらいたい。

「葵？」

彼女の瞳が徐々に変化していく。

俺の空気迎合させて、落ち着いた重い空気へと……。

「好きだから。貴方のことが……俺、こんな気持ちになつたのは初めてだよ。なんて言つたらいいかわからないけど、貴方のことが大好きなんだ」

理由なんてない。

どうして好きになつたとか、どこを好きになつたのかとか……そんなことわからない。

だけど、これだけは言える。

「貴方が、好きだよ」

そうやつて優しく彼女の髪を撫でてみる。

彼女はそれを振り払おうとした。その逆に、安心したように微笑んだ。

「……うん。ありがとう」

その一言が俺の心を揺れ動かした。

俺の気持ちを彼女は受け入れてくれたんだ。彼女が俺の恋人になるとか、そんなことよりも俺の気持ちを受け入れてくれた、それが妙

に嬉しかった。

嬉しくて、堪らなくて……。

「あ、葵？！」

「「」め……ッ」

勝手に涙が浮かんでくる。

もつと今の貴方を見ていきたいのに……。

たくさん、胸の中に焼き付けておきたいのに……。

涙が止まらなくなる。

目の前にいる優しい彼女の顔が、涙で滲んで霞んで……消えてしまった。

好きっていう理由だけで、彼女の一言だけでこんなに、こんなに涙が出てくるなんて。

……知らなかつた。

ありがとうつて、凄くキレイな言葉なんだ……。

キレイな言葉が俺の穢れている心に染み渡つてくる。

「……葵、ありがとう。大丈夫、大丈夫だから」

柔らかい声で彼女は涙を零す情けない俺を引き寄せた。

優しく、そして力強く。

彼女の腕の中に落ち着いた俺は、どうにか涙を止めようと必死になる。

だつて、こんなの男の恥だ。

守りたい彼女に守られてどうする！？

「葵は優しい子だね。そうやって素直に自分の気持ちを言えて、純粋に涙を流せる人つて少ないと思うよ。真っ直ぐな子だよね」

昔は直球な性格が災いして、イラついたらすぐ他人を傷付けたりしていた。嫌なことがあると、周囲に当たり散らした。

その逆に、嬉しかったことや楽しいことを表現するのが凄く恥ずかしくて、格好悪くてわざと突っぱねていた。

だけど今は、そういう嬉しいことや楽しいことを彼女に言いたくてたまらない。

彼女に、俺の気持ちを何でも報告したいんだ。

だからといって、イイラついたことや嫌なことまで言いたいとは思わない。むしろ、そういうた感情こそ恥ずかしくて格好悪いと思つてしまつ。

彼女は俺のことを、真つ直ぐな優しい子だと言つてくれた。

“子”って言われるほど、ガキじゃないけど。

……けど。

「ありがとう…」

今教わつたばかりのキレイな言葉を、今度は俺から彼女に贈つた。俺のことをうりやうりやつて言つてくれるのが彼女で本当に良かったと思う。

いや、彼女だからこそ言えたことなのかもしれない。

だつて俺は、彼女と出会つて変わつたのだから。

もつと自分を好きになれるような気がしていた。

二日目、俺はようやく『ありがとう』の本当の意味を知つた気がした。

三日目

今日は俺が誘つてみた。

サクラは昨日のお礼つて言つて誘いを承諾してくれた。

だが……どこへ連れて行つたらいいんだ…？

まず俺は、女とどこかへ出掛けたことが無い。

女が喜びそうな場所とかが全くわからない。

そして何よりも金が無かつた。

「金つてなんだかんだ言つてもやっぱり必要だよな……

溜息が漏れてしまう。

大企業のお嬢さんを連れ回している俺の全財産が三十円なんて、アホだ。

情けない…。

待ち合わせ場所である、大通りの桜の木の下で俺は難しい顔をして

いた。

「葵！」

それを打ち消してくれるような明るいサクラの声。

「待たせて、ゴメンネ」

「ああ、いや…」

「どうしたの？ 難しい顔して」

「その、考えるんだけど、どこに連れて行つたら……」
俺がしどろもどろ言葉を並べていると、言いたいことを察してくれたのかサクラが俺の手首を掴んだ。

「私、行きたいところがあるんだ。行こー！」

そしてそのまま引っ張られた。

サクラの後ろを歩いているとサクラの匂いが風に乗つて俺のところに届く。

甘い香り。

でもしつこくなくて、花のような香りだ。

「昨日家族の話をしたでしょ？ 昔、家族で住んでた家がこの近くにあるの」

そう言いながら俺をぐいぐい引っ張つていく。

俺は妙に嬉しくなつていた。

サクラのさつきの言い方は俺に家族を紹介してくれるような感じだった。

それってだいぶ心を開いてくれてるって証拠だよな？

「……ふつ

「ん？ どうしたの？」

「顔がニヤけてしまう。

どうしようもなく締まりの悪い顔になつてしまつ。

「何笑つてるの～？」

「なんでもないよ！」

俺は意地悪そうに言つてやつた。

ニヤける原因なんてサクラに言えるか！

俺は心中で勝ち誇ったような気分になっていた。

駅についてバスに乗る。

サクラが『私の勝手だから』と言つてバス代を出してくれた。

俺は手持ちの三十円をサクラの鞄へと気付かれないように入れた。

ごめん、という謝罪の気持ちと一緒に。

バスに揺られ、十五分くらいのところで降りた。

その停留所を見て俺は、不安感が高まっていたが楽しそうなサクラの後を付いて歩いていった。

俺の口数が減っていく。

動搖が隠しきれなくなつていった。

足取りも重く、まるで向かい風の中を歩いていたようだつた。

サクラは住宅街の一角で足を止めると、正面にある白い大きな家を指差して言つた。

「ここが私の家族が住んでた家だよ。今は家族バラバラに住んでいるから、この家は売りに出されちゃつているけどね……」

彼女が寂しそうに呟いた横で俺は、手に汗を握つていた。

「この辺はキレイな家が多いよね。私が小さかつたときから何も変わらない」

「……」

「葵？ どうしたの？」

嘘だろ。

頭も心も真っ白だ。

彼女の家が、俺を捨てた母親が今住んでいる家の隣だつたなんて……

「！」

「あ、いや。サクラの家も大きいけど、と、隣の家も大きいんだなと思つて……」

「そうだね。私が小さい時からよくお世話になつてね～」

つてことは、サクラとアイツは知り合いつてこと？？

何で……

するとタイミングよくその家の玄関が開いた。

「あ、」

サクラと俺が一緒に声を上げた。

サクラは嬉しそうに、俺は……。

そのままサクラが玄関のほうに顎だけ出した。

「藤原さん！」

その声に玄関から出てきた人物が顔を上げる。

「……あら、サクラちゃん」

俺はその人の顔を見た瞬間、石のように固まってしまった。地面から足が離れない。

震えが止まらない。

「久し振りね。元気にしてた？最近会ってなかつたから、キレイになつたわね～」

その人は俺の母親だった。

俺を捨てた母親…。

「困つたわね……もう少し早く来てくれていたらお茶でも出せたんだけど……。これから出掛けなきゃいけなくて」「いいえ。また伺います」

「本当!」めんなさいね。…………あら? そちらの方は?」

ふと後ろのほうにいる俺に気付いて、不思議そうな顔をしたあとサクラのほうをむいて二コリと微笑んだ。

「サクラちゃんの恋人かしら」

「そんなんじゃないですよ」

サクラが俺のところに近寄ると、腕を引っ張った。

俺はその反動でようやく足が動いた。

「私の友達で、葵って言つの」

相手は俺の顔を間近で見てハッとした表情をした。

「あ、おい……」

「どうかしたんですか?」

相手の驚いた表情を見てサクラが不思議そうな顔をした。

「い、いえ。別に何でもないわ。少し昔のこと思い出しちまつて…」

「昔のことですか…。でも、今は今ですよ」

「…………う、ね。ありがとう、サクラひちゃん」

サクラの言葉を、俺の過去を知らない彼女が言つたのだから俺は仕方ないと思つた。

“今は今”という言葉だけでは到底済まされない過去だから…。それを知りながら、サクラの言葉を肯定した母親を俺は許せなかつた。

顔が険しくなる自分がわかつた。

「あの子は今、どこにいるのかわからぬものね…」

「藤原さん…」

サクラが優しく相手の名を呼ぶ。

「こつかきつと会えますよ

ね?と柔らかく微笑む。

「やうね、ありがとう。じゃあ、またお時間が出来たらいらっしゃい

い

相手は俺の顔をチラリと見ると、軽く会釈をして俺たちの前を去つていった。

二人残された俺たちは彼女の背を見えなくなるまで見送つた。

「藤原さんつてキレイだよね

「……」

俺はサクラの言葉に何も返せなかつた。

昔の自分が甦つてきたかのように黒く汚い感情が心を支配し、顔は険しくなつていた。

「…………おい?…………あおい?..」

「へ?…な、何?」

「どうしたの?ここに来てから変だよ

「やう、か?」

心配そうに頷く。

心配掛けてはいけないと思うの」、顔が険しいまま戻らない。

「葵、どこか落ち着く場所に行こう。ね？」

俺は無言でしたが、彼女はそのまま歩き出した。

その後を俯き加減で付いて行く。

俺は覚えていた。

施設の前で“ごめんね”と言って俺から離れていた母親の顔を。

俺の手をアイツは振り払った。

絶対に許せない。

あのときの記憶は俺の中に色濃く残っている。

残酷な過去。

俺たちはそのまま駅向かいにあるファミレスに入った。

「コーヒーとウーロン茶を頼んだ後、サクラが話し始めた。

「藤原さんにはね、もう一人子供がいたんだって。もちろん今の旦那さんとの子供じゃないんだけど、今の旦那さんと結婚するときこそ施設に預けてきちゃったんだって」

「……あつそ。最低だな」

そつぽを向いて不機嫌そうに答えた。

「どうして？どうして最低だって思うの？」

「子供を置き去りにして、自分は好きな男と何一つ不自由なく暮らしてゐるんだ。その子供はどうなるんだよ。最低だろ！」

俺は無意識に語尾を強めてしまった。

「葵……」

「……ひめん

「最低だつたかもしれない。……でも、その裏にはちゃんと理由があるんだよ」

一体どんな言い訳をしていたのか俺は興味が湧いた。

「理由つて？」

「前の旦那さんが亡くなつた後、生活に苦しくなつてね、ホステスをしたんだつて。そこで今の旦那さんに出会つた。生活苦のことを

話したら、自分と一緒に住んでくれたら面倒を見るつて言われたんだって。だけど子供は施設へ預けるつて言われて、嫌だつて拒否したんだけどお金に苦しくなつてそのまま子供に辛い生活させるつは、施設に預けて三食きちんとと飯を食べられるよつた生活をさせたほうがマシだつて。そして今の旦那さんと結婚をした。だけどその子供とは会つてはいけないつてキック言われてたみたいで……」
結局、俺を見捨てた。

自分は結婚していい暮らしを得て……。

「それが理由? そんなの勝手だろ。それに会つなつて言つても会いに来ようとするのが母親じやねえのかよ。」

「違うよ! ……確かに、勝手かもしれない。でも藤原さんは悩んでいたよ。会えなくなつて、居場所もわからなくなつて、今どんな生活しているのか元気でいるのか心配だつて」

心配されたつて……そんなの今更だ。

「藤原さんね、いつもお財布の中にその子供の写真持つているんだよ。昔の写真だからボロボロでクシャクシャになつちやつているけど、自分にとつては宝物だからつて」

じゃあ、なんである時会いにこようとしなかつたんだよ。

旦那の言葉なんか振り払つて、俺に会いに来ようと……！

「今更だろ……」

「葵は、その子供の気持ちがわかるんだね……。でも子供を守るために、敢えて離れたつて考えられない? 子供が大切だから、元気でずっとといて欲しいからだから自分とは離れた。結果的に藤原さんは今、不自由ない暮らしをしているかも知れない。その子供はどこかで苦しい生活をしているかも知れない。でもそういうことも全部考えながら、藤原さんは毎日生活しているんだよ。おなかを痛めて生んだ子供を、心配しない親なんていないと思つ」
サクラは俺がその子供だって知らないはずなのに、俺の心に響くつうに真つ直ぐ伝えた。

俺はその言葉に頷くしかなかつた。

間があつて店員が俺たちのテーブルに頬んだ飲み物を丁寧に置いていった。

俺はカップに入っているコーヒーの水面を眺めながらボソッと呟いた。

「…………お互いに辛いのかもな」

サクラが何を言つたつて母親のことを許そなんて思わなかつた。それぐらい憎んでいた。

だけど憎んだつて過去は変わらない。

死んでしまつたという俺の事実を母親は一生知ることはないのだから。

そして、そのまま辛い思いと共に母親はこれから先も生き続ける。「その子はきっと独りじゃないよ。藤原さんが毎日、毎日写真を眺めて祈つてくれているんだから。生きていても何も心配してくれない親よりはずつと幸せだよ」

憎しみは何も生まれないしマイナスの感情は哀しいだけ。

そうわかつていても母親のことは許せなかつた。

これから先も絶対に許せないと思つ。

だけど憎むのはもう止めよう。

疲れるし、こんな感情をサクラは喜ばない。

「でも俺はその藤原つて奴を許すことは出来ない。子供が可哀相だから」

「そつか。だけど受け入れてあげて。そういう思いもあるつてことを」

キレイ事ばかりじゃ通じない。

聞き分けのいい人間にはなりたくない。

でもサクラの言うことにも一理ある。

それに相手を許せたらどんなに楽だろうつてずつと思つていた。

許せない相手だからこそそう思つていた。

だけど受け入れることなら、俺にも出来るだろつか……。

「大人になつたらさ、許せるようになるかな……？」

「うん…きっとなるよ。でもね、葵は葵のままいいんだよ
優しい、いつもの笑顔に救われる。

どん底の過去までもが明るい日差しに覆われてこりょうだ。
自分は自分のままいい。

その言葉がとても嬉しくて、心地良かつた。
サクラはきっと俺の過去を知つてもこいつして笑顔でいてくれるだろ
う。

受け入れてくれるだらう。

「サクラは凄えよ。偉いよね」

「え? なんで?」

不思議そうに首を傾げるサクラを見て俺は吹き出した。

生きていたときに出会つていれば、俺はどんな人間になつていただ
りう。

問うてはいけないことなのに、それでも思つてしまつ。
生きていたときにサクラと出会つていたかった、と。

過去に決着をつけた後、俺たちはファミレスを出た。
金のない俺に代わつてサクラがコーヒー代を出してくれた。
年上の私が奢るのは当然でしょと、サクラは笑つて言った。
俺は再び自分を情けないと思つてしまつた。

サクラのマンションまで送つていく途中、駅の構内を通りて行った。
改札口の辺りを歩いているときふとサクラが言つた。

「不思議だよね~。葵とは一昨日、ここにで会つたばかりなのに
「だよな。もうこんなに仲良くなるなんて」

俺の方は意図的に、だけど。

「葵があの時私を助けてくれなかつたら、こいついう風に仲良くなれ
なかつたかもしないもんね。本当あの時はありがとつ」

「別に助けたつて訳じゃねえよ」

サクラにありがとうつて言われると妙に照れる。
顔を逸らしてわざと強めに否定した。

それに助けたわけじゃないのは本当だ。

サクラはそう思っているかも知れないけれど、この世に来たのはサクラに恩返しをするためなんだから、助けるって言つたのはちよつと違う。

「また何か困つたことがあつたら言えよ」

俺は頼もしそうにそう言つた。

俺が彼女を救えることなんかほとんどないかも知れないけれど、それでも彼女の悩みを少しでも減らしてあげたかった。もつと幸せになれるように、もつと笑顔でいられるよ。

大通りに出でいつもの歩道を歩いていた。

俺がずっと寄り掛かってきた桜の木がある。

あの日満開だった桜は、もう半分ほど散つてきていた。

「儂いよな、桜つて」

ポツリ、彼女が呟く。

「あつという間に散つちゃう」

桜の木の下に立ち止まり、その散つていく花びらたちを見上げた。

「だからこそキレイなんだろ？」

「え？」

「そういうもんじゃね？」

「…………うん、そうかもね」

散つてしまつとわかつている運命だから、心に焼き付けようとする。

それは今の俺と似てゐるかも知れない。

いなくなる運命だからこそ、彼女の笑顔をもつと見たいくつて思つ。

俺たちが桜の木を見上げていると、歩道の先のほうから声がした。

「サクラさん！」

その声に振り返ると、二十代後半くらいの男がスース姿で立つていた。

「富田さん……」

相手はサクラの名を呼んだんだから、サクラと相手が知り合い同士なのはすぐにわかつた。

サクラは相手の名を口にするべく少し困ったような顔をした。

「サクラ…？」

俺は心配して、サクラの顔色を窺つた。

顔色がよくない。

俺はキツと相手を睨んだ。

「今日は出かける予定でしたよね？何度電話してもつながらないから、家へ伺つたんですけど、他の方と出掛けていたんですね」「ゆつくりと相手は歩き出し、俺たちの前へ現れた。

身長は俺よりもある。

体格もよく、清潔そうに切つた短い髪が爽やかさを醸し出していた。

「君、サクラさんと親交があるようだが、名前は？」

俺を見下ろすようにそう言う相手に俺は嫌悪感を抱いた。

「あんたこそ誰なんだよ。急に現れてその言い方はねえだろ。それに、」

サクラにこんな顔をさせるなんて最低だと叫おうとした時、サクラが俺の腕を引っ張つて口を開いた。

「昨日話した、私の婚約者だよ。不動産会社の富田商事の息子さん……。それから私に桜の木をプレゼントしてくれた人」

不動産会社……富田商事……。

……？！

マジかよ！

俺でも知つてゐるほどの大会社だ。

その息子……、そしてその婚約者がサクラ……？

「……富田さん、今日のことはごめんなさい。忘れていたわけじゃないの。でも……私、あなたとのこと、少し考えたいの。私まだ結婚とか、そんなこと……」

「そうですか。しかしお父上がそれを聞いたらどんな思いをされるでしょう」「うう」

俺は動搖していたが、富田と言つ男がサクラに投げかける冷たい言葉を聞いて我に返つた。サクラの性格を知つていてこういう脅しを

する男なら、俺は許せない。

「あんた、サクラのこと好きなのかよ」

「葵...？」

サクラのためなら何でも出来る。

「サクラの何を知つてんだよ。会社のためだか何だか知らねえけど、人の気持ちを無視して人の人生勝手に決めんな！」

「待つてくれ。僕は、サクラさんに幸せになつて欲しいだけだ」

「はつ、どうだか？！……サクラは優しい。放つておかれてるつて言つてもサクラは父親のことを家族だと思っているし、そんな父親を脅しの文句に出されたら堪らないもんな！あんたのやつていることは脅迫なんだよ！」

「葵、もういいよ。ありがと」

サクラが俺の腕を掴む。

力なく、頼りなく…。

「サクラ、お前もきちんと自分の気持ち言えよ！こんなの、サクラの人生じやねえよ」

「……ん。 そうだね、 そうだよね」

薄つすらとその瞳には涙が溜まつていた。

「富田さん、私、貴方のことを何も知らない。何も知らないのに、好きになれるわけがない。結婚できるわけが無いの」

声を震わせて、涙を堪えてサクラは言葉にした。

相手は驚いて、口をポカンと開けたままだった。

「さつきみたいに脅迫めいたこと言つたら、貴方との付き合いを解消するから」

今度はしつかりした口調で言つた。

すると相手がフウと息をついた。

「……。…………わかつて いましたよ

「え？」

「貴方が僕のこと好きではないこと。本当は今日貴方の本心を聞

こうと思つて誘つていたんです。だけど、…………僕は間違つてたのかもしない。いや、気付いていながら気付かない振りをしていました。会社のため、名誉のため……。それでは会社は成り立つてはいけないのに」

「そう言つてあつさり引いた。

「富田さん……？ そんな簡単でいいんですか？」

「なんか裏があるんじゃねえの？」

俺はそれでも疑つていた。

「君はサクラさんの方が本当に大切なんだね」

「なっ！？」

そうきつぱり言われ顔がカーッと熱くなるのを感じた。

「そういう気持ちが僕にもあつたら……。僕も勇気がないんです。自分の気持ちを押し殺してしまつことがよくある。今回のこともうなんです。だから敢えて汚いことを言つてあなたに嫌われようとした」

「…………」

「富田さん……」

相手の顔がどんどん柔らかくなつていて気付いた。

「貴方の気持ちをきちんと聞けて良かった。そして僕も自分の気持ちを言えて良かった」

そう言つて二コリと微笑んだ。

次期社長が見せる笑顔とは程遠いくらいに柔らかく、幼げに。

「でも父が……」

「何故僕と貴方の婚約が決まつたか知つていますか？」

「いいえ」

「貴方と僕の父親が親友同士だった。ただそれだけですよ。信頼できる相手の子供なら、結婚させても大変な思いをせずにいられるだろう、貴方のお父親はそう思い無理にでも結婚をせよつとしていたのです。全部貴方のためにね」

「それが真実だつた……」

「でも会社のためつて父は言つていた。有利になる結婚だつて」

「本当のことなんて言えるわけないでしょ。常に企業のトップを走ってきた会社の社長が娘のために一肌脱いだなんて。恥ずかしくて言えなかつたんでしょう。でも今の話は本当のことです」
サクラの父親はサクラのために結婚をさせようとしていた。
間違つたやり方かもしれないが、娘に幸せになつて欲しくて……。

子供を思う気持ちは人それぞれ、か。

「僕も貴方のお父上のような人間になりたいものです……。さて、僕はこれで失礼致します。両父親には僕から上手く伝えておきますので、サクラさんもまた僕と話がしたくなつたらいつでも連絡くださいね」

相手は最初の印象とはまるで違つ物腰で会釈をすると去つていった。
「ありがとうございました！本当にありがとうございます」

サクラはその姿が見えなくなるまで礼を言い続けた。
その姿は車のライトに照らされていて、眩しかつた。

「サクラ。…………良かつたじやん」

真実が聞けて。

サクラは独りじゃない。

「うん、葵もありがとうね。この前富田さんから桜の木をもらつて、
こんな迷つた気持ちの私には似合わない花だからここに手向けちゃ
つたんだ……。でも逃げちゃいけないってわかつたよ。だつて葵のお
父さんも、私のお母さんも天国で私たちのこと見守つてくれている
んだよね。なのに私、いつも独りとかつて卑屈になつてた」
「独りじゃないよ……」

俺がサクラを絶対に独りにはさせない。

「サクラは今までも、これからも独りじゃないよ

「そうだよね、ありがとう。私、お父さんともきちんと話をしてみ
るよ」

希望に満ちた目は俺を安心させた。

真実つて俺たちが考えているよりも簡単で意外に素直なのかもしけ

ない。

俺たち自身が問題を難しくして、眞実から遠のいていっているのか
も……。

「相手と腹割り話さないと解決つて難しいってことだよな
サクラがその言葉に、感慨深げに頷いていた。

俺たちはようやく桜の木の下から歩き出したがお互いに想いことが
あるのか、何も口を開こうとしなかった。

それでもサクラの隣は居心地が良かつた。

俺つてこんなに涙もろかつたっけ？

涙が出そうになるくらい……。

「明日も会える？」

俺はそう、即答した後氣付いた。

明日が最期の日だってことを。

「…………葵？」

心配そうに覗き込む彼女の顔。
近くで見るとキレイで整った顔。
思わず触れたくなつてしまつ。
だけど触れたら最後。

俺は未練タラタラでこの世から消えることになるだろう。

そんなのは嫌だった。

俺がそんな迷った気持ちでいたら彼女はきっと心配する。
俺のためにそんな表情をするのは嫌だから。

「ごめん、明日は何する？どこか行く？」

「そうだね。臨海公園とかは？大きい観覧車があるでしょ

「わかった。じゃあ、また明日」

最期の明日。

でも俺は決意していた。

彼女に切ない恋物語として終わらせないようになろう。

どうやつたらいいかとかそんなことはわからないけれど、そつ思つていた。

空を見上げると都会の星空が悲しく光つていた。

四日目

臨海公園。

地下鉄の駅からバスで十分程度揺られると、大きな観覧車が見えてくる。

商業施設と、広い芝生。

サイクリングロードがあり、休日になるとカツブルや家族連れが多く訪れる。

俺たちはバスから降りると、さっそく観覧車へ向かった。

日本一の大きさという観覧車の広告文句が乗り場の近くに貼られていた。

春休みだが平日である今日はさほど密もおらず、俺たちは五分くらいで乗ることが出来た。

今朝から俺の心臓が大きく波打つているのがわかる。もう時間がないのだと警告しているかのように……。

わかってるよ、よくわかってる。

俺はここにはいちゃいけない存在だもんな。

観覧車の中は結構広く四人くらいは楽に入れる大きさだった。

「楽しみ~」

サクラが嬉しそうにはしゃぐ。

その向かいの席で俺はドギマギしていた。

こんな密室でサクラと二人きりなんて、どこを見ていいいのかまったくわからない。

完全に目が泳いでしまっている……。

「晴れて良かつたね~。上に行つたら景色がいいんだろ? なあ

「…………だな」

この観覧車は一周するのに十五分かかるらしい。

俺にとつては長い十五分だ。

早く終わって欲しいけど、終わって欲しくない…。

そんな空氣だつた。

「葵、顔色悪いよ?」

「大丈夫だよ」

「嘘。もしかして高所恐怖症?」

サクラと密室でいるのに緊張して、観覧車を楽しめていないだけ。

……なんてとても言えない。

「別にそうじやねえよ」

俺は外の景色を見ながらそう言った。

まだ地上から十メートルといったところだろうか。

遠くまで見渡せる高さではなかつた。

「葵…」

「え? あ、おい!」

サクラが突然席を立つと、俺の隣に腰掛けってきた。より密接になつてしまつた俺とサクラ。

「大丈夫だよ」

サクラは優しく言つと、俺の手を握つた。

俺がガチガチなのは高所恐怖症のせいだと勘違いしているのだろう。握つた手をもう片方の手で撫でてくれていた。

「私が隣にいるから。ね?」

チラリと隣にいるサクラの顔を盗み見る。

「あ、……ん」

目と目が合つて思わず顔をそむけてしまった。

優しくて、キレイで、温かい。

もつともつとサクラのことが好きになつてしまつた。

緊張してドキドキして胸が苦しいのに、こんなに隣にいたいって思うのは何故だらう。

「ごめんね、私のわがままで観覧車に乗せちゃつて」

「別にいいよ」

「でも葵と乗りたかったの。葵と景色見たかったんだ」

俺と…。

その言葉が嬉しくて、辛かつた。

「……」

嬉しくて辛くて、俺は自分でもわからない行動をとってしまった。

「あ、葵？」

俺は彼女の体を抱き締めていたのだった。

「ど、したの？」

「…わからない。わからないけど」

「ううん。

本当はわかってる。

わかっているけど、口にしたくない。

もつとずっと隣にいたいのに……もうじき、サヨナラになることなんか……。

こんなにも時間が惜しいって思ったことない。

一分が、一秒が惜しみなくて大切で…。

「葵、痛いよ~」

「え？！あ、御免！！」

想いと比例してきつと抱き締めていた腕を少し緩めた。

「もう少し、こうしていてもいい？」

「……うん。あつたかいね、葵の腕の中」

嬉しそうな彼女の声が聞こえる。

彼女の声を聞くと安心する。

ここにいるんだって実感するから…。

「……神、様……」

ポソリと俺の口から出でてしまった。

「何？」

俺から体を離し、その言葉を再度伺うサクラ。

「え？あ、ううん。なんでもない」

そう言つて必死に笑顔を見せた。

「そう？」

いまいち腑に落ちない顔をする彼女に、もつと自然な笑顔を向け頷いた。

「幸せだなって思つただけだよ！」

俺は無邪気に言つと、もう一度彼女を抱き締めた。

本心を告げたつもりだった。

だけど言葉にした途端、涙が零れてきてしまったのだ。

それを彼女に悟られたくなかった。

神様。

もう少し、あと少しだけ……。

時間を止められないのなら、せめてあと少しだけ……。

彼女の傍にいさせてください。

昼過ぎ、俺たちはオープンカフェにいた。

広いカフェ内。

トラック式の売り場もあり、気軽に利用客が飲食できるようになつてている。

天気が良く昼飯の時間は終わっていたが、俺たちのほかにも何組か食事をしていた。

「さ、食べよ」

今日はサクラが手料理を持ってきてくれていた。

一段式になっている弁当箱には、ウインナー・ハンバーグ、サラダ、おにぎりが入つていた。

「味は保障できないけどね」

「でも美味そうだよ」

俺はウキウキしながら一番端のおにぎりを手に取つた。

「いただきます」

サクラが見守る中、がぶつと大きな口でおにぎりを頬張る。

「ん、美味しいよ」

『いっぴにして俺は言った。

「良かった。それじゃ、私もいただきます」

『口二口しながらサクラもおにぎりに手を付けた。

温かい空気が流れる。

晴れた空の下。

大好きな人の食事。

本当に最期の日に相応しいほど幸せだった。

ねえ、サクラ……。

ありがとな。

俺は食べながら田を細めた。

俺たちが飯を食っているときも何組も家族や恋人達がカフェ内に訪れている。

「なんか遠足気分って感じだよね」

「ああ、外で食べると余計、美味しいな」

そう言って弁当箱に入っている唐揚げに手をつけようとしたり

つた。

「あれ？ 燐……？」

俺たちのテーブルを通り過ぎようとしていた一組のカップルの、男のほうが声を掛けてきた。

「燎じやね？」

「…………？」

タク……。

俺があの日、事故る直前まで一緒にいた奴だった。

口は悪いが氣のいい奴で、連れの中でも一番仲が良かつた。

「お前、燎だろ？！」

俺は驚いたが、少し俯いた。

『燎！ どうしたんだよ？！ 何キレイでんだよ！』

『別にキレイでなんかねえよ。うぜえんだよ、ほつとけ』

『燎！』

俺はあの日、タクが掛けてくれた声を振り落つて死んでいった。

あの時タクの言葉に耳を傾けていたら……俺がもつと人に心を開いていたら……。

でもそんなの今更だ。

俺は死んで、タクは生き続けている。

もし俺が生きていたとしても、タクには会わせる顔が無い。

「…………違つ」

「あ？」

「俺はあんたのことなんか知らねえよ」

タクの顔を見てそう言つてしまつた。

死んだ俺が生き返つたなんて混乱させるだけだ。

「葵……？ 知り合い？」

サクラがキヨトンとした顔で俺を見ている。

そうだ、サクラに今バレたら困る。

こんなに楽しい食事の時間を悲しい空氣にさせるとわけにはいかない。

「知らない奴だよ」

俺は微笑んで言つた。

「ごめん、タク。

お前とももつと話したかったよ。

無愛想だつた俺の傍にいつもお前はいてくれた。つるんでくれた。

なのに俺は突つ撥ねてたんだよな。

お前にも礼を言つておきたかったのに……。

「ごめん、本当にあんたのこと知らねえんだ」

「そ……つか。 そうだよな。 アイツはい……ない……。 それにアイツ、お前みたいにそんなに柔らかく笑える奴じやなかつたから。だからアイツなわけねえよな」

タク……。

初めて見た、タクの悲しそうな表情。

俺は耐え切れなかつた。

「ねえ、もう行こ」

タクの彼女らしき女が、タクの腕を引っ張った。

「ああ。…………悪いな、声なんか掛けちゃって」

「いや」「……」

昔の記憶が甦る。

お前と笑い合つた日々、俺は忘れないよ。

タクが歩き出した。

もう一度と会えない、ダチ。

「あのやー」

俺は立ち上がった。

「ん？」

タクが振り返る。

タク……俺は……。

「声掛けてくれてありがとうな」

必死な声で、自然な笑みで。

「は？」

「あ、いや

タクは俺の言葉に怪訝な顔をすると、彼女に腕を引っ張られるよう

にして俺の前から去つて行つた。

ありがとう、タク。

俺のこと覚えていてくれてありがとう。

俺が再び座ると、サクラが笑顔で唐揚げを差し出してくれた。

「食べよ

「…………ああ

俺は独りじゃなかつたんだよな。

今も、昔も。

誰かに気に掛けてもうえることがこんなに当たり前で嬉しいことだ

つたなんて……。

どうして俺は気付かなかつたんだろう。

タクも母親も……。

「あの人、会えるといいね」

サクラがポツリ言つ。

「ん?」

「さつきの人。葵とそっくりな人と会いたがつてゐるようだつたか

ら

「……だな」

俺が死んでるつて知つてゐるはずなのに。

タク、それでも俺に会いたいつて思つてくれたりするのか?

「きつと会えるよね」

「……ん」

俺は幸せだつたんだ。

皆は俺の傍にいてくれていたんだ。

……ありがとう。

俺はふとカフェ内で楽しそうに毎飯を食べている親子を見て思い出したかのようになつた。

「あのさ、昨日会つた藤原さんにまた今度会つたら伝えてもらえる?」

もう一度と会うことは無い俺の母親。

「あんたは独りじゃないって」

「?...葵が伝えたほうがいいんじゃない?」

「サクラが伝えたほうが、話が丸く收まるんだよ」

俺がまたあそこに行つたらきっとややこしくなる。

あの人にはあの人今の人生がある。

それを壊したくなかった。

「必ず伝えて」

「ん、わかつた」

俺は爽快な気分だつた。

あんなに嫌つて憎んでいた母親のことなのに、何故かスッキリとした氣分だつた。

俺が消えるまであと少し。

後悔はしたくない。

心の傍にいてくれた人を俺は見守つていきたから……。

タク……母親……。

そして、サクラ……。

貴方を独りにはさせないよ。

昼食を終え、臨海公園内にあるショッピングセンターでサクラの買い物を付き合つた。

陽がどんどん沈んでいく。

彼女が何を話していたのか、どんな表情をしていたのか俺は覚えていない。

時間が経つのが怖くて、苦しくて堪らなかつた。

彼女が隣にいても俺には余裕なんか全然無くて……。

俺はただただ願つていた。

時間が経たないことを、そして永遠に彼女の隣にいられるこつとを。買い物を終え外に出ると陽が沈んでいた。

臨海公園にある歩道。

観覧車がライトアップされていてロマンチックに演出されている。だけど……もうすぐゲームセツトだ。

ドクンと俺の心臓が波打つた。

「明日、富田さんとのこと父親と話すんだ。なんだか不安だな~」

彼女に悟られないようにわざと平穏を保つように深呼吸して笑顔で

答えた。

「大丈夫だよ。前にも言つたろ? サクラはサクラのままでいいんだつて」

いつか貴方が俺に言つてくれた言葉。

気付いて、貴方こそそのままでいいことを。

「そうだよね」

さっぱりとした声で彼女が言つ。

そのままのサクラが俺は好きだ。

悩んだり、怒ったり、泣いたり……自分の感情に素直な彼女が好きだから……。

迷わないで欲しい、見失わないで欲しい。

「私ね、気付いたんだ。葵と一緒にいて、自分の気持ちに」

「ん？」

真正面に向き直すとサクラは大きく息を吸った。

「私も葵のことが好きだよ」

「…………え？」

突然の告白。

俺は正直驚いてしまった。

「初めはね、宮田さんとのことだけざりしていて、ちょうど会つた葵を口実にしようとしていたの。この人が好きだから貴方とは付き合えないって……。だから会つた日、葵を誘つたんだけど……口実にするなんて卑怯なこと出来なかつた。葵が優しくて、私の話をちゃんと聞いてくれたから。そして気付いたら凄く好きになつたの」

俺がひたすら目を丸くしていると、彼女はいつもの笑顔を向けてくれた。

優しくて、柔らかい。

「昔、葵がどうだったとか関係ない。今ここにいる葵が好きなの。それじゃ葵は不満？」

彼女の言葉にブンブンと首を横に振つた。

「フフ。……ありがと」

照れた表情で彼女は言つ。

何か言わなきや。

彼女のために何か……。

俺の頭の中はフル回転だ。

だって、まさか彼女が俺のことを好きになつてくれるなんて思わなかつたし……。嬉しさが、もう離れなければならないという運命の悪戯の切なさを上回る。

「俺…、俺も好きだから。貴方を大切に思つてゐる俺の告白に、彼女は温かい笑みを零した。
そつと彼女の手を握る。

柔らかい…。

「俺が守るから。何があつても、守る。約束するよ
「わかつてゐるよ」

「俺のこと、信じてくれる?」

「大丈夫。葵は心配性だな。大丈夫だよ
おつかしいな…。

俺が彼女を安心させなきやいけないのに、彼女の大丈夫って言つ葉に俺のほうが安心しているなんて。

バツカみてえ。

「…ハハツ。笑っちゃうよ…」

やつぱり俺は情けない。

「どうしたの?」

「ん? 何でもねえよ。ただ、女つて凄えなと思つてさ」

「…………?」

彼女がいてくれてよかつたと本当に思つ。

彼女が彼女であることに感謝する。

そして、俺が俺であつたことにも感謝したい。

だつてどつちかが違つていたら、こんな風に相手を想えることはなかつたと思うから。

そう思つた瞬間に体がズンと重くなつた。

…………そろそろ時間か。

覚悟は出来ていた。

彼女と出会つて四日。

一日、一日カウントしてきた。

だけど早すぎる……。

時が過ぎるのが早すぎるよ。

けど、もうゲームオーバーだ。これ以上は本当の罰当たりになる。

「……。貴方は……強いから、きつと平氣だよね？」
俺は切り替えしたように、静かな口調で言った。

「……え？」

「俺が……いなくて……」

彼女の表情が瞬く間に不安に満ちていく。

そりやそうだ。

今の俺の言葉は、どう聞いても別れの言葉にしか聞こえない。

「……」めん、本当急だよな

「何言つてゐの？……葵？」

空気が一瞬で変わる。

幸せな温かい空氣から、ヒンヤリとした重い空氣へ。

目の前にいる彼女の動搖が伝わってくる、が、俺のほうこそ動搖が

激しくて……彼女への配慮が出来ない状態だ。

「今から大切なことを話すよ。だからきちんと聞いて

もしかしたら彼女はこれから話すことを信じないかも知れない。

いや、信じないだらうな。

だけど、それでも言わなきゃならない……。

誰よりも、何よりも大切な人だから。

俺の言葉に彼女は深く頷く。

それを確認してから俺は口を開いて話し出した。

「俺、事故つたって言つたじやん？あの日、無免で俺は単車に乗つていた。無免つて言つても、よく乗つてたから運転が下手つてわけじゃなかつたんだ。だけど夜で大雨の日つて初めてで……」
あの日の光景が脳裏に浮かんでくる。

体に叩き付ける雨の粒。

耳に響く豪雨の音。

「なのに強がつて、ヘルメットもしなかつた。連れと別れた後、孤独を紛らわせるためにスピード出して走つた。単車に乗つているときだけは、孤独とか嫌なこととか忘れられたから……。だけど、結局はそんな俺に神から罰が下つたんだ。……タイヤがスピンした。本

当に一瞬の出来事だつたよ

視界が瞬時に様変わりしていく。

焦点が合わない。

濡れた路面が目の中へ飛び込んでくる。

そして、遠くのほうでドスンと何やら生々しい音が聞こえ……。

「俺は、……死んだ」

記憶が途切れた。

その後は、自分の葬式を見て……それからはずつとあの路側帯にある小さな墓で一年もの間、人を観察していた。

薄暗い闇の中で一人、ずっと取り残されていた。

俺の心の中ですつと孤独な雨が降り続いていた。

一周忌だつた日、貴方が現れたんだ。

「貴方は俺の光だつた。初めて見たとき、貴方の姿に心が奪われたんだ」

貴方の微笑が心を安心させた。

貴方の涙が心を締め付けた。

「前に、命に代えても貴方を守るつて言つたろ？」ここでまた、命を亡くすことになつたら……それこそ、その言葉が実行されるときなんだ。俺の命を引き換えに、貴方を辛い目に一生遭わせない

そのとき、パチン！と何かが響いた。

俺の目から星が散りばめられたように感じた後、ジンジンと頬が熱く痛くなってきた。

彼女が俺の頬を叩いたつて気付くのに時間はかからなかつた。

だつて彼女は、叩いた俺の頬より痛そうに自分の手を握つていたから。

そして悲愴に暮れた表情で哀しそうな涙を零すんだ。

「わかつてない。葵は全然わかつてないよ！私の辛いことは、私が決める。私の一番辛いことは、葵……貴方と別れることだよ？命に代えて私を守るなんてことしなくてもいい。私はただ、葵にずっと傍にいてほしいだけなの」

……彼女の涙が俺の心を痛くする。

そうだな、わかつていなのは俺のまづだ。
彼女と出会つたせいで、彼女をまた悲しい目に遭わせることがある
んだもんな。

「……」めん

「謝らないで……」

「だけど、俺……」

彼女は首を横に振つた。

「なんとなくわかつてた、こうなること」

「え？」

「今、なんて……？」

「確証を持っていたわけじゃないけど、なんとなく、ね。だつて葵、突然現れたんだもん。だからいつか、突然いなくなるんだろうな……つて思つてた。けど、それはあくまでも私の勝手な想像で……。
それがまさか本当になるなんて」

更に顔が陰つっていく……。

「俺の言葉、信じてくれるの？」

「信じるも信じないも、葵は嘘をつく子じゃないでしょ？」

そう言つて俺の手を取り『ホラ』と視線を手に落とすよつて図面した。

「え！？」

透けていた。

既に指先は縁だけを残し、中は透けている状態だった。
わかつていたことだけど、こうやつて消えていくのかと田の当たりにされて……俺は、かなり衝撃を受けた。
「俺、また死ぬんだ。大好きな貴方を残して……。」こうやつて死んでいくんだ

無意識にボツリと呟く。

一度目のほうが辛いのは何故だろ？

死ぬことってこんなに辛いものだつたんだ。

「葵…？」

彼女が優しく俺の名を呼んだ。

「葵が死ぬなら、私も死ぬよ」

「な、！？」

「だつて当たり前でしょ？こんなに…こんなに好きになつた人い
ないもん」

彼女の感情と共に比例して一気に溢れ出していく涙たち。

こんな表情の彼女は見たことがない。

今まで一番、哀しい顔をしている。

彼女を守つてあげたい…助けてあげたい、そう思つていたのに結
局俺が一番彼女に哀しい思いをさせてしまった。

「貴方が死んだら私が悲しむよ」

「葵が死んだら私が悲しむ！」

「…………悲しまないで。こんな俺なんかで…」

俺一人がいなくなつたつて、世界は変わらない。
たいした存在じやないからな。

「こんな俺、なんて言わないのでよ。私にとつたら、たつた一人の人
なんだから。誰よりも大切な…」

貴方は知らないよね。

俺を思つて泣いてくれる、笑つてくれる、『大切』だつて言つてくれ
ることがどんなに嬉しいか。

どんなに哀しいかを。

「俺にとつても大切な人だよ。失いたくなんかない。だからずつと
生きていて欲しい。ずっとずつと、生きていて欲しいんだ」

俺の決意の瞳に彼女は溜息を漏らした。

「本当、葵には敵わないや……。ずっと、つて私は不老不死の体を
持つてゐるわけじゃないんだからね」

そう言いながら小さく頬を膨らませる。

「…………ありがとう」

俺にはその言葉しか残されていなかつた。

きっと、何度も言つても言い足りない言葉だらう。

「まつたく～」

苦笑しながら彼女は言つ。

ねえ、貴方の目に僕はどう映つている?

初めて会つた日のように、幼い弟のように映つていてるのかな?

それじゃ、貴方の心に僕はどう映つていてる?

本当は僕だってずっとここにいたいし、彼女と離れ離れになんかなりたくない。

だけど、覚悟を決めていたんだ。

貴方と離れることを。

「まさかこんなに辛いとは……」

思わなかつたけどさ。

けどね、俺が死んでも貴方の笑顔だけは残しておきたいんだ。

貴方の優しい笑顔をずっと見せていて欲しい。

いろんな人に。

俺だけじゃないと思う。

貴方の笑顔に支えられている人は……。

俺は、彼女に微笑んだ。

「本当は独り占めしたいくらいなんだけどね

「……え?」

だけど、それじゃもつと貴方を苦しめていく。

そんなのは御免だからさ。

「葵、……」

「ん?」

「初めて会つた日に言つてくれたよね。勇気四日分、処方してやる

つて。憶てる?」

俺は静かに頷いた。

「あれ、もう一度処方してくれない?」

「え?」

「これからも葵がいなくなつても……きっと、頑張つて……自分の足

で歩いていける勇気をちょうどいい

彼女の震えた声に俺は哀しく笑つた。

「…バツカジやねえの？」

彼女から言わると思わなかつた。

“葵がいなくなつても”

本当にいなくなるんだつて思わされた。

実感というよりも現実が……、俺ではなく彼女の現実が手に取るようを感じられた。

「そんなの、当たり前じゃん。勇気と俺の全部、サクラにやるよ。四日分じゃなくて、一生分を」

もし一回目の人生で俺が幸せになれる権利を持つていたら、その分も彼女にプレゼントしたいと思つ。そして二回目の人生での幸福も……。

俺が好きになつた人なんだ。

サクラが俺のために幸せになる権利はあるはず。

「何もかもサクラにあげるよ。そして刻んでいってほしい」

「葵……」

潤んだ瞳の彼女が、俺の視界の中にある。

「俺、前に言つたよね？ 貴方を置いていかないつて。ずっと近くで見守つてはいるつて。それは本當だから。俺が消えても、俺の想いと存在は貴方と一緒にいるから」

貴方がこれから誰を想うことになつても。

何年、何十年と経つても。

「俺は貴方から離れない。ずっと傍にいるよ」

俺は柔らかく言つた。

「…………死なないよ」

震えた声で彼女が口を開く。

「え？」

「葵は死なないつてば。死ぬのは一度で十分だよ。葵は、」

そう言つて力強く俺の瞳を見た。

初めて見たときから知っていたし、思っていた。

彼女が強いことを。

誰よりも、芯が真っ直ぐで強いつてことを。

俺の手には決して届かないほど、強い人だつてことを。

「葵は光になるんだよ」

そんな彼女に俺は支えられていたんだ。

ずっと、ずっと。

「……貴方が言つなら、それは真実だね」

微かに唇を動かすと、一の腕のほうまでほとんど消えかけている俺のその腕で彼女を抱き締めた。

彼女の体温が安らかな気持ちにさせてくれる。

悲しくて苦しくて、辛い現実からその体温だけが俺を安堵の場所へと連れて行つてくれるようだつた。

「私もいつかそこへ行けるかな……」

「行けるよ。サクラがシワシワな婆さんになつてからね」

「待つていてくれる……？私がお婆さんになつてそこに行くまで」

待つよ。

いつまでも貴方を待つ。

だけど、それは俺のわがままになる。

「その時ちゃんと幸せだつたら迎えに行つてあげるよ」

俺は彼女の体を静かに離しながら言つた。

「葵……ツ」

そんな俺を見て彼女は声を震わせた。

……さよならだ。

俺の体はほとんど消えていたから

「ねえ、どこに行くのー？」

焦つた表情。

潤む瞳。

別れの現実が押し寄せる。

「サクラ……すげえ、いい名前。初めて会ったときから、そつずつ

と思つてたよ」

「え……？」

桜、その花言葉のよつこ。

「純潔で清らからで……。貴方は俺の愛だつた「もつ、そろそろ時間だ……。体が重くなつていく。「じめん。もう、行かなきや。……楽しかつたよ、貴方といられて」

「嫌だよ、どこに行くの？私も連れてつて！！」

瞳を潤ませ、困った顔をする貴方を抱き締めたい。手を伸ばして、同じ世界へ奪い去つてしまいたい。

きっと、貴方は抵抗しないだろう。

だつて俺と貴方の気持ちは同じだから……。

俺だつて、貴方が言つよつにこの場にいたい。この地にずっとといたい。

「だけど、駄目なんだ……」

運命がそうさせてくれない。

こんなにも悲しい運命なら、いつそこつちから壊してやりたいぐら
いだけど……貴方はそんなことをしたらきっと悲しむから。
苦しい思いをするだろうから。

だから、俺は笑つていたい。貴方の前では、ずっと笑顔でいたい。

「ねえ、俺の願い聞いてくれる？」

「…………え？」

どんな辛い状況にいても、どんな苦しい立場に置かれても、俺は貴
方がいるだけで幸せだつた。貴方が俺の隣にいる。貴方が生きてい
る。

金では買えない永久不变の愛。

俺はそれを知つたんだ。

だから俺は、

「貴方の笑顔が見たい……。笑つて欲しい。そして俺の本当の名前を
知つて欲しいんだ」

俺の宝をもう一度見たい。
キレイな宝物を。

「本当の……？」

「うん、俺の本当の名前は燎。…………燎だよ
唯一ずっとつき続けていた彼女への嘘。
やつとその呪縛から解ける……。

彼女は戸惑つていたが、俺の変わらぬ瞳に少しだけ自分の瞳を重ね
ると優しく……。

笑つた。

そして、こう言った。

「…………燎」

何度も、何度も彼女は俺の嘘の名を呼んだ。
もう数え切れなくらい。

だけど、今日ほど今ほど胸が切なく、熱くなつていいくことはなかつ
た。

ありがとう、俺の本当の名前を知つてくれて。
ありがとう、呼んでくれて。

その名前で呼ばれると本当に生きているんだつて実感する。

バカだな……。

もつと早く自分の本当の名前を貴方に知つてもらえばよかつたのに。
結局後悔ばかりだ……。

触れることが出来ない、愛しい人。

それでも触れたいと願つてしまつ。

「サクラ……。貴方が好きだよ。とつても、愛してる」

「燎？」

透けた体。

もう、時間がない俺と貴方の距離。

俺は少しづつ彼女に近付いた。そして、触れることが出来ない手で
彼女の頬を包み込んだ。触れていないのに、何でだろ？

「あつたかい……」

彼女のぬくもりが伝わってくるようだ。

「俺の気持ちは変わらない。貴方を見守つていくから……」

瞳から零れ落ちる涙が、俺の心を締め付ける。

もう泣かないで……。

そんな想いと共に俺は彼女の瞳に唇を落とした。

もつと好きだつて言いたかった。

もつとありがとうつて言いたかった。

もつといつぱい貴方に触れたかった。

透けて、ほとんど見えなくなつた俺の姿。

彼女にはどう映つてゐるのだろうか。

「ありがとう……」

呟くと、俺は彼女の前から消え去つた。

「りょう　　ツ！」

彼女の声が俺の心に届いてくる。響いて、波のように何度も繰り返される。

その日、俺と彼女が初めて会つたあの路側帯に咲いていた桜が全て散つていたことを、俺は、彼女の前から消えてから知つた。

まさしく俺の命のように……短く、儚く。

……　　淡い季節。

四日の恋と永遠の愛。

もう一度季節が巡り、そしてまた桜が咲く。

俺は、俺たちの出会いをずっと奇跡だと思つていたんだ。

だけど、違う。

奇跡つて一度と起こらないことを指す言葉だよね。

だったら俺と貴方の出会いは奇跡なんかじゃなくて偶然……いや、もつと確実な必然になるね。

これから俺は貴方をまた触れられない、交わつてはいけない世界から見守つていくことになる。

あの日、彼女が俺の前に初めて現れた日。

闇にいた俺を彼女は引っ張り出してくれた。淡いピンク色に染まる

桜を俺に差し出して、温かく笑つて。

嬉しかつたんだ。そんな笑顔を向けられたことなんかなかつたから。
だから、思う。

今度は俺がサクラを助ける番なんだ。

どんな形でもいいから……生きてまた貴方に会いたかつた。
サクラ、貴方に……。

サクラに傍にいてほしいんじやなくて、俺がサクラの傍にいたかつた。

この出会いが奇跡なんかじゃないなら、もう一度、何度でも俺は貴方に会えるよね？そして、貴方の温かい笑顔を見れるんだ。
きっと、何度でも……。

サクラ。

貴方の名前を口に出して呼びたい。そしたら貴方は笑顔を向けて俺のところに駆け寄つてくれるんだろ？

今度生き返つたら、もう俺は桜と共に散つたりしない。
奇跡なんか、運命なんか信じない。

ただ目の前にある真実を、そして俺の想いを信じて生きていく。

「サクラ……俺の永遠の人」

俺、二回目の人生は本当幸せだつたよ。

それは勿論、貴方に会えたから。

そして最期に貴方は俺の名前を呼んでくれた。
何度聞いても聞き足りない貴方の声、言葉。
すっげえ嬉しかつた。

知つてる？

俺貴方の言葉の中で、一番好きな言の葉があつたんだ。

それは俺を呼ぶときの貴方の声。

俺はその声に、言葉に何度も振り返るよ。

貴方が、そこにいてくれることを信じて……。

また季節が巡る。

淡いピンク色の桜が咲く季節が、幾度も繰り返されていく

。

ねえ、サクラ？

俺の我儘を聞いてくれる？

……俺を。

俺を、忘れないで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7039d/>

Last Lover

2010年12月26日16時57分発行